

二 豊津町周辺の初期寺院

(一) 椿市廃寺（行橋市福丸）

四天王寺式

行橋市の北西部で、小波瀬川に沿って開けた狭長な平野の最奥部福丸地区に位置する。現在

伽藍配置

は天台宗の願光寺が建っているが、その庫裏を中心とした一帯の水田下に廃寺は埋没してい

る。昭和五十二年（一九七七）から三か年にわたって行橋市教育委員会による発掘調査が行われ、その結果伽藍配置は南から北へ塔・金堂・講堂が直線上に並ぶ四天王寺形式であることが確認された。

平成四年（一九九二）には、椿市地区の圃場整備事業に先立って再び廃寺跡の調査が行われ、講堂の基壇の石組みや版築・回廊の柱穴群などが出土している（第11図参照）。

多彩な文化

これまでの主な出土遺物は、塔の心礎（第12図）をはじめ陶磁器類・瓦などである。瓦は百

交流のあと

済系軒丸瓦、重弧文軒平瓦、新羅系軒平瓦、高句麗系軒丸瓦、大宰府系軒丸瓦、平城宮跡

出土の瓦に酷似する軒丸瓦などがある。土器では土師器・須恵器、磁器では龍泉窯系碗・同安窯系皿などがある。そのほか銅銭・銅鈴・螺髪・羽口が出土しているが、出土遺物には内外との多彩な文化交流の跡をみることができる（第13図参照）。

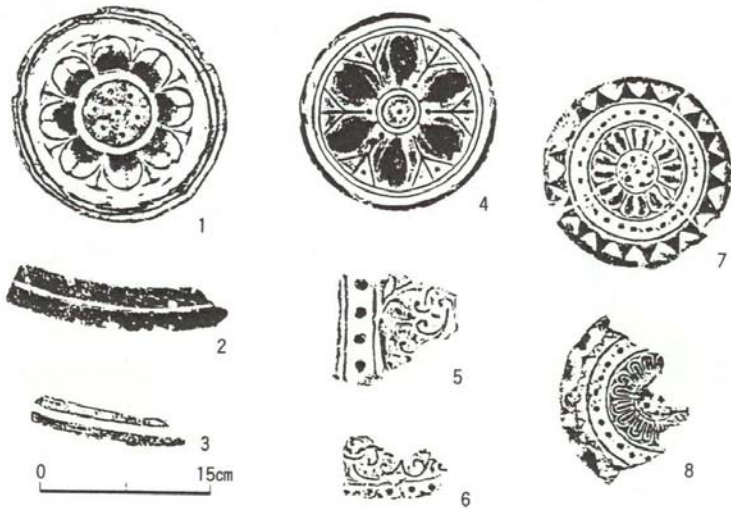
本廃寺の存続期間は、七世紀から九世紀にかけて存続したものとみて大過ないものと考ええる。



第11図 椿市廃寺跡の発掘 (行橋市教育委員会提供)



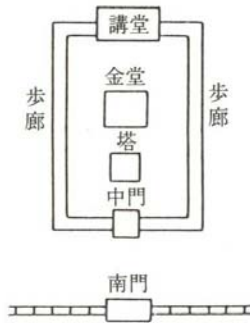
第12図 椿市廃寺跡の塔心礎



- 1 百濟系軒丸瓦 2、3 重弧文軒平瓦 4 高句麗系軒丸瓦
 5、6 新羅系軒平瓦 7 大宰府系軒丸瓦
 8 軒丸瓦 (平城宮跡出土6284型式に酷似)

第13図 椿市廃寺出土瓦 (一部) 拓影

(「椿市廃寺」行橋市教育委員会 1980より)



椿市廃寺の伽藍配置

(二) 木山廃寺(犀川町木山)

明治の土地
改修で出土

木山集落の南側で、今川の支流である松坂川の堆積物で作られた低丘陵上に位置する。この廃寺の遺構は明治九年(二八七六)ごろの土地改修工事により出土したが、しかし、このときの工事ではほとんどが消滅したと考えられている。

伝えられるところでは、その際、大量の瓦や礎石が出土したといわれる。そのなかでも巨大な花崗岩の塔の基礎は割られて、現在ではその一部が木山集落内にある塞の神の石柱に転用されているが、その石柱の中央部左側には柄穴の残欠がみられる(第14図参照)。

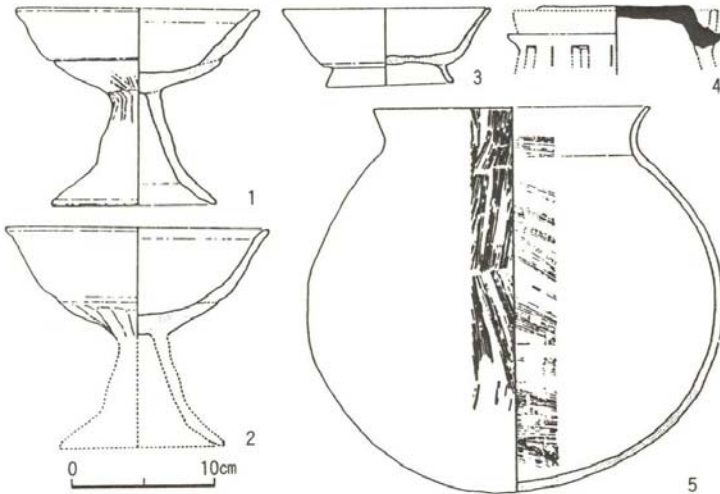
不明な伽藍配置

昭和四十九年(一九七四)には廃寺跡と推定される水田が再び圃場整備の対象地となったため、遺構確認のための調査が行われた。

この調査では寺院としての堂塔などの検出はできなかつたものの、この廃寺の創建の年代を推定させる瓦をはじめ土器類などが発見されている。主な出土品には百済系軒丸瓦、重弧文軒平瓦、大宰府系軒丸瓦・軒平瓦、須恵器坏、土師器高坏・甕、硯、輪堂礎石(平安時代と推定)などがある。本寺院は七世紀後半ごろに創建されたと考えられるが、言い伝えでは鎌倉時代まで続いたといわれる。なお木山廃寺の瓦を焼成した窯跡としては、廃寺から北西約一キロメートルの山麓部に福六瓦窯跡がある(第15・16・17図参照)。



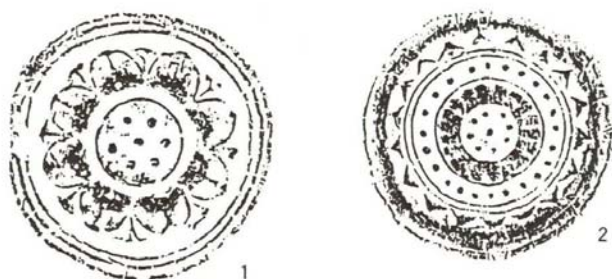
第14図 木山廃寺の転用された塔心礎



1、2 高杯 (土師器) 3 高台付杯 (須恵器) 4 円面硯片 (須恵器)
5 壺 (土師器)

第15図 木山廃寺跡出土土器実測図
(「木山廃寺」犀川町教育委員会 1975より)

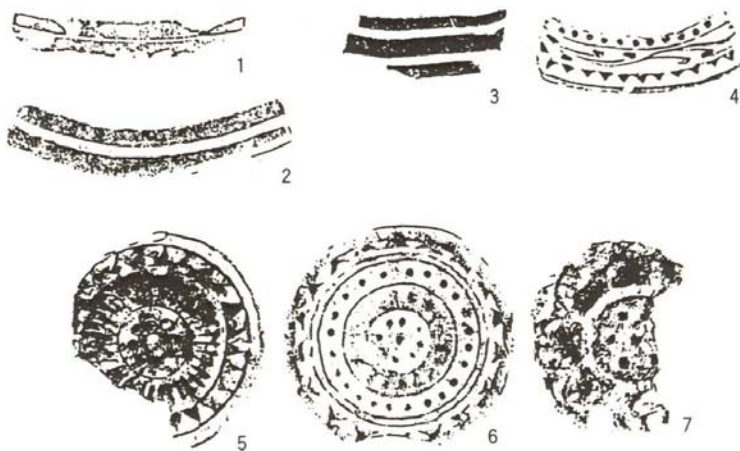
第2章 古代郷土の夜明け



1 百済系軒丸瓦 2 大宰府系軒丸瓦

第16図 木山廃寺出土瓦拓影

(「木山廃寺」犀川町教育委員会 1975より)



1、2、3 重弧文軒平瓦 4 大宰府系軒平瓦 5、6 大宰府系軒丸瓦
7 百済系軒丸瓦

第17図 福六瓦窯跡出土瓦拓影